

# 旅する真葛

hikali



1.

忙しい学内を抜けて、寒々とした街路樹の間を大通り沿いに歩くと、馴染みのカフェ——シャムロックがある。

騒々しい街中を十分も歩くだけの価値はある。

「いらっしゃい」

「久実ちゃん、紅茶ね」

「あれ？ 今日、水曜日でしたっけ？ マスター、紅茶です！」

はじけるような声にほっとため息をつき、抱えた学会誌と論文と、それに喧々諤々の議論の束を下ろし、達也はほっと窓辺の席に腰を下ろす。柔らかな陽射しの向こうには、寒空に飾られたゴールドクレスト。静かなインストゥールメンタルは、暖かなクリスマスソングに変わっていた。

（祝ってないなあ、クリスマス、もうずいぶん）

ささやかなツリーに笑いかける。それで十分な気がしまう。

「どうぞ」

置かれたティーカップが、いつものあまい湯気をたてる。

「雪でも降りそうですね。飾ったんですか？」

「大変だったですよ？ マスター、凝るから。降ってもらわないとやってられません」

「なんでです？」

「入るんです、お客さんが、たぶん、寒いから」

「へえ」

シャムロックの午後三時はいつも閑散としていて、ランチとパブで賑わうすこし高いカフェは、騒々しい研究室からの逃亡先としては絶好といえた。

バッグから出した、論文のページを繰り、三色のボールペンで線を引いていく。

カップに口をつけると、空気に香りがとけた。

カランと鳴って、ドアが開き、静かな女性の声が響く。

「あの、すみません。ここ、煙草吸えますか？」

「あ、うちは」

久実の声を奥からマスターが遮る。

「ええ、大丈夫ですよ、わたしも吸いますから」

え？ と視線を上げると、その筋骨逞しい顔が、達也に大丈夫だよな、と念を押す。

「ぼくは構いませんけど……」

なにげに女性に視線を向ける。

「じゃあ、ホットを」

スーツ姿の女性は近くのテーブル席に座る。達也と歳は変わらないのではと思えるほど若く、それに不似合いなほどの大きな革のトランクケース、長い黒髪にぴったりの黒縁の眼鏡をいじり、ほそい煙をくゆらせて煙草を吸った。



美人だった。

生まれて初めて、心が動揺するのを感じた。

助けを求めるようにマスターをちらりと見ようとするが、それも出来ない。やがて、久実がティーカップを置き、砂糖とミルクを添える。

「どうぞ」

女性はゆっくりと煙草を消し、静かに言った。

「これは紅茶です。コーヒーを頼んだつもりだったんですが」

小首を傾げる久実に、鼻白んでいう。

「ホットコーヒーです」

マスターが奥から、遠回しに言う。

「入れ直しますよ、アイリッシュしかありませんが。お時間、大丈夫ですか？」

女性は時計を見て、細い顎を揺らした。

会社勤めにはみえない女性だった。鞆がオフィスには不似合いに思えたし、古風なチェック柄のスカート、淡い灰のベスト、ベージュのコートは趣味的と取られても文句は言えない。

達也は知り合いの女の子たちを思い起こす。

(この人のクリスマスはどんなだろう?)

全身を血液が駆け上るのを覚え、また論文に目を向ける。線を引こうとするが、肝心な内容がまったく入ってこない。カチカチと色を変えるが、変わるのは芯で、気持ちではない。

(まいったな)

おそろおそろといった様子でホットコーヒーを運ばれてくる。

案の定、どこかでなにかがカチンと鳴る音が、気まずい店内に響いた。

「これは？」

カップには攪拌されたコーヒーと、その上に大量の生クリーム。そして普通なら、

「ウイスキーは入っていませんよ」

「あ、当たり前です」

マスターは困ったなあを頭をかく。

「アイリッシュ・コーヒーしかご用意できないのです。当店はアイリッシュ・カフェです」

女性は、細い指を眼鏡にあて、冷静に問い詰めるような声で聞く。

「なぜ、それを先に言わないのですか？」

「ちょっと」

達也は声を出していた。

女性が達也を向いて、視線が合う。

達也はそれをあまりにも無防備に見つめてしまう。

「なに？」

「あ、い、いえ。言っていましたよね、アイリッシュしかないって、マスターが、それに」

「それに？」

「クリスマス、……、ですし」

あきれたように立ち上がり、達也のところまでやってくる。



「もうクリスマスだから、コーヒーは出せないというの？」

「いえ、そうではなく、ほら、聞いてください、クリスマスソングです、この曲は確か」

「ハッピー・クリスマス。ジョン・レノン」

「そうそう、それです」

女性をあきらめたようにため息をつき、椅子に腰を下ろした。

「落ち着けてことですよ？」

「ええ、まあ、たぶん……」

久実があたらしい紅茶を運んでくると、ささくれだった空気は静かになった。

女性は煙草に火をつけ、ゆるやかな煙を眺めながら物思いにふける。

「おいしい」

至近でつぶやく。

達也は論文に集中している振りに熱心になる。

ラインを引く、ページを繰る、考えているように指で額をコツコツと叩く。

精読しなければならない資料は現実に山積みで、しかもそれほど時間が残っているわけではない。

「大学の方ですか？ とても忙しいんですね」

不意に声を掛けられ、ちらと上目遣いに見る。

「ええ、学会が近いんです。今年は号令がかかっちゃってて」

「史学科か何かですか？」

「産業文化史をやっています」

なるほどとうなずくゆるやかな視線が達也を、かなしばりのように包み込む。

がたんと椅子が音を立てた。

「こ、これ、宮川寅之助じゃないですか」

「え？ 宮川？」

ぽかんと見上げると、眼鏡の奥の目をまんまるくして立ち尽くしている。

達也はあわてて論文を見る。

——フィラデルフィア万国博覧会における日本館出品物の評価とその影響

1876年、明治9年に開かれた国際博覧会。開国まもなく開かれた国際舞台への大きな扉だ。ここに日本政府は自慢の陶工たちの作品を送った。唯一の輸出産品として。

それがどんな覚悟だったかは、記録がない。

それが達也の研究だった。

「宮川寅之助、号は真葛香山、著名な陶芸家です」

「え、ええ、真葛ですね。ああ、たしかに真葛焼は出品されていますが、それが？」

女性は眼鏡をずらす。

「たしか、真葛香山の陶器はシカゴの博覧会で世界レベルの名声を得たはずで。それがなぜフィラデルフィアで、こんなに？ まだ明治のはじめでは……」

「ああ、確かに。でも、その前のフィラデルフィアが確定的だったんです。パリ（明治22年）でも十分な評価を得ています。シカゴ（明治26年）が世界展開のきっかけですが、日本代表として万国博覧会に出るほどですから、十分に活躍していたのでしょう。まあ、この論文によればですが」

意見が食い違う。

「マクスウェアって、海外では呼ばれていますよね？」

「ずいぶん輸出したみたいですし、真葛焼の窯には外国人の金持ちたちが列を作ったようです。当時も高かったんですから、いま買えばとんでもない額でしょう」

女性は深刻に何かを考え、すぐに言った。

「入っているんです、あのトランクケースに」

「なにが、ですか？」

「なにって、その、マクスウェアが」

しばらく意味がつかめなかったが、とっさに声が出た。

「本物……、ですか？」

「あたりまえです。偽物なんて、うちは絶対に取り扱いません」

あわててハンドバッグを探り名刺入れを、一枚を達也に差し出す。

店名と思わしき表示の下に、白河貴子、と細い毛筆字で記してある。

にこっと貴子は笑った。

「先週、ロンドンのスタッフから届いたんです、だから里帰り。うちのお客さまのお一人がぜひ見たいって、それでこれから」

「はあ……」

貴子はちらっと時計を見た。

「二時間弱あります。ぜひ教えて欲しいんです」

せがむような貴子の顔を見て、この人はいろんな表情がそれぞれに美しいんだな、と達也はぼんやりと思った。

「なに、……を？」

「産業文化史。万国博覧会の周辺を重点的に」

## 2.

彼女の簡潔な話によれば、彼女は古美術商の端くれで、そのマクズウェアははじめて取引をするお客さまへお見せするもので、上客であるため大事な取引なのだとか。

テレビでいまだにやっているなんとか鑑定団の世界。

日々自分が紙面上で追っかけているものたちが時空を超えて、すてきな女性として舞い降りたような気さえして、達也は目眩を覚えた。

もちろん、そのような品々を見ることはある。

しかしそれは博物館のガラスケース越しで、実際の古美術品は達也の研究の対象ですらなく、その産業としての歴史を追うことが達也の本来の研究。それが目の前の女性はそれを売買しているのだという。

マクズウェアを買うだって？

まさか。

彼女によれば、真葛はコレクターも多いのだが、彼らを魅了するのはその装飾的な作品はもちろんのことであるが、なによりもそのストーリーに魅了されるのだとか。彼女は、マクズウェア自体のことはさすがに知っているのだが、その周りに渦巻いていた物語を知らない。

そう、確かに達也はそのストーリーを知っていた。

マクズウェアの物語はこうだ。

フィラデルフィアが明治9年なのだから、話はもっと昔に遡る。

明治が始まってまもない頃。元号こそ明治と変わっているが、この頃はどちらかというとも幕末の続きで、幕府の代わりに薩摩藩、長州藩、土佐藩、肥後藩の4藩が明治政権を立てていた。それが明治20年ぐらいまで続く、江戸時代の続きのような時代。

しかし、外国人は入ってくる。

物珍しさもあったのだろうが目的は貿易で、たとえば戦艦やら、洋服やら、機械やら、日本にはないものを売りに来る。しかし、当の日本には産業らしい産業が無く、金や銀をそのまま輸出していたぐらい。たくさんあるからと言ってちょんまげを持って帰るわけには行かず、明治政府は必死になって輸出品を作ろうとした。

そのひとつが、日本の陶磁器だった。

伊万里、九谷、有田を挙げるまでもなく日本には優れた陶磁器の産地と腕の立つ陶工があまいたいて、そこに西洋の陶磁技術が入り、爆発するように陶磁器産業が花開く。最盛期には陶工数百人の陶器工場が建つぐらいで、競争力のある産業として発達する。

その中で台頭してくるのが、真葛香山をはじめとする名だたる陶工たち。

今で言えば、ルイ・ヴィトンや、シャネルのようなカリスマ的なデザイナーによって創始されたジャパンプランド。彼らが江戸と西洋が混じり合った、エキゾチックで、ゴージャスな陶磁器文化を創り出す。

それは、フランスで勃興したジャポニズムと呼応するように、アールヌーボーなどの芸術様式と影響を与え合う。



ジャポニズムという今では北斎をはじめとする浮世絵なのだけど、実はその浮世絵が包んでいたのが、つまり浮世絵は包装紙だったのだけど、この輸出陶磁器だった、と。

一気に話すと、貴子は息をつく。

「知ってました？ だからぐちゃぐちゃの新聞紙のように北斎は届いたのです」

「それは浮世絵コレクターが日本にやってきますよね」

貴子は、はじかれたように、くっくと笑う。

なにせ、お気に入りの作品がめちゃくちゃになっているのだ。包み紙にするぐらいなのだから、大量にあるに違いない。そう思ってもおかしくない。達也は嬉しくなって言う。

「文化が産業になるというのはふしぎなものです。それが世界に認められていく」

「マクスウェアは、日本にはほとんど残ってないんです。だから、とても高値になる。わたしたちも海外にネットワークを持って探すのですが、なかなかキャッチできない。今回はほんとうに幸運で」

「ほしがる人があるのですか？」

「それは、沢山。でも今回のようなケースは珍しいかも」

達也は首を傾げるが、さすがに古美術品の取引は門外漢だ。貴子が言う。

「まだ、万国博覧会の話聞いてない」

「ああ、そうですね、そう、こういった陶工たちの作品を紹介する絶好の機会が万国博覧会だったんです。世界の産業商品が並ぶ中、日本を代表する商品として売り込まれた」

「晴れ舞台ですね」

「ええ、その通り」

達也は頷く。

「たぶん、マクスウェアと呼ばれるようになったのは、シカゴ以降でしょう。フィラデルフィア、パリで徐々にそういう陶磁器があると知って評判になって、シカゴで一気に世界的に広まったという感じ。これはぼくの勝手な推測ですが」

貴子は満足そうに頷き、立ち上がる。

「ありがとう、上手く話せそう」

「いえ、まあ、これぐらい」

貴子は躊躇していたが、思いきって言う。

「もしよろしかったら、見ます？ マクスウェア。研究されているんですよね？」

「いいんですか？」

時計をちらりと見て、頷く。

「まだだいぶ時間はありますし、これぐらいしかお礼も出来ませんし、ほんとうはいけないんですけど、」

あまり高い品物ではありませんから、とささやくように言う。

それから、トランクケースを引き寄せハンドバックから鍵を、厳かにカチリとやった。

ケースを開けた貴子の手が止まる。

数秒の静止ののち、そのきれいな首筋が震えはじめた。

「ない、……なくなっている」

か細い声がそう告げた。

白くほそいひとさし指が緩衝材のバスタオルに触れ、一枚一枚トランクケースから引く出し、シャムロックのテーブルの上にきれいに重ねられていく。てきぱきと動く貴子のほっそりとした手首でアンティークなネジマキ時計がゆれるのに、達也はどきりとする。

年代物の、リストアされてぴかぴかになって大切にされている時計。

それが彼女の手首でうれしそうにはしゃぐのを見るだけで、彼女の手はきれいな仕事をする手だと思えてしまう。

「ない、……やっぱり、ありません……」

バスタオルの最後の一枚をうずたかくなったタオルの山の一番上に畳み、貴子はトランクケースをみつめて、深いためいきをつく。

「忘れてきたんですか？」

おそろおそろ聞く達也に、貴子は両目をつぶって首を横に振る。

「いえ、昨日の夜にちゃんと確かめましたし、それから一度もこの鍵は開けていません……。現にいま、閉まってましたし」

「持ってくる鞆を間違えたとか」

「なら、この鍵で開くはずがありません」

理路整然とした答えがすぐに返ってくる。達也は次第に、密室事件めいた話に夢中になる。すぐに思い付く。

「でも、品物が入っていなければ、重さで気付くんじゃないかな？」

「とても小さい品なんです。お客さまもわたしもはじめての取引だから、あまり高いものは出来ないって、安めの品をお持ちしたのです……」

貴子は3センチぐらいの高さを示す。

「これぐらいの獅子の小物なんです。風流な品ではあるのですが、マクズにしては小品すぎる。それでもほしいと思う方には、なかなかない品だけに、ぜひ見てみたいと思うような、そんな品で」

達也は貴子の言葉から、古美術商の世界を想像して見ようとしてみたが、それは異質な別世界で、達也にはずいぶん遠いところのような気がしてしまう。

達也は目の前の論文の束をみる。

それから視線を上げると、ぼうぜんとした女性の姿があった。

「ねえ、白河さん、でしたね？ 探しましょうよ、それ」

貴子は妙にはりきる達也を驚いてみるが、すぐに思案を巡らす。

「どうやって、ですか？」

「そりゃあ、」

達也は席をたって、厨房の方へ呼び掛ける。

「マスター！ ちょっと来てくれませんか？ ピンチなんです！」

筋骨ばった長身が、両手をタオルで拭きながら奥から現れたのは、貴子と達也に成す術がなくなってから5分もたった頃だった。

無言で現れ、うなだれる二人を眺めた後に、静かな声で聞く。

「達也、知っているだろう？ 今の時間は忙しいんだ。手短かに頼む」

立ち上がった達也は、これまでの話を端的に話す。

貴子のトランクケースに今日の取引の品である陶磁器が入っていなかったこと。それは3センチほどのあまり大きくない物であること。トランクケースには鍵がかかっていたこと。開けた時にも鍵がかかっていたこと。トランクケースにはいつかかかっていたことは昨夜の晩に確かめたこと。

そして、今回の取引は貴子にとっては初めての取引で、相手が上客であるために失敗できないこと。

マスターは静かに頷き、短く聞く。

「で、鍵を持っているのは、白河さん、あなただけなのですよ？」

「え？ ええ。このケースはロンドンで見つけた珍しい品ですから」

「無くしたら、どうします、その鍵を」

思わぬ言葉に貴子は逡巡するが、きっぱりいう。

「このケースを壊すしかありません」

「なるほど」

マスターは考え込む。

「お店から、シャムロックまでどう来られたか、教えてください」

「シャムロック？」

「この店の名前ですよ。幸運の四つ葉のクローバー」

「あ、だからアイリッシュ・カフェなんですね、どこかで聞いたと思ったら」

マスターはおやという顔をするが、無言で促すと貴子は話しはじめる。

「店から最寄り駅までは歩いて10分もかからないのです。そこから半蔵門線で九段下で乗り換えて、それからご存知だと思いますが、東西線です」

「降りればシャムロックまで5分か」

達也が割り込むように呟く。

「ねえ、どこかでトイレにでも入ったんじゃないかな？ そうたとえば、九段下で」

「そ、そんなこと」

貴子が赤面して愕然とする。

「答えられません」

「なぜ、わざわざアイリッシュ・カフェに？」

マスターの言葉に貴子はああと答える。

「タバコを吸えて時間が潰せるところがほしかったんです。約束まで2時間もあったから。地下鉄を出てからいくつかのお店を尋ねたのですが」

「なるほど。このあたりはどこも禁煙のお店ばかりですからね」

とぼけるようなマスターの答えように、達也はかちんと来る。

(なににいつてるんだろ、シャムロックは普段は禁煙じゃないか)

そこで、達也は気付く。

(そっか、マスターはあの時、とっさに気を利かせたんだ……)

わずかな尊敬の念を持って悩みこむマスターをみるが、同時に不安に押し潰されそうな貴子をみていると、いてもたってもいられなくなる。

「もうさ、これまで通った駅とか、入ったトイレとかを探さないと」

「そんな時間はありません！ それに、トイレも入っていません！」

「時間が残っているなら、諦めてはダメだ」

達也がとっさに貴子の手首を引くのと同時に、マスターが腕を組み、自信なさそうに、口を開く。

「それたぶん、お店にあります」

「ですが、鍵がかかっていたし、前日に確認を……」

貴子は抗議をするが、真剣に考え込むマスターをみるうちに考えが変わってくる。

「いえ、なぜだかは分からないんです、情報が少なすぎて。でも、お店にあるのです。逆にいえばそこにしかない」

「マスターは名探偵なんだ。だから必ず当たるよ。いこう。間に合う？」

慌てて時計に目を、それからこくりと頷く。

「タクシーなら。ギリギリかも」

貴子はまだ悩んでいるマスターにちらと一瞥を、マスターはすぐに気付いてにっこりと笑う。

「顛末、教えてください。ボクにもまだ謎だらけで」

貴子は妙に嬉しくなって、先に道路に出てタクシーを止めようとしている達也の背を追った。店内のインストゥールメンタルが乗り移るように、貴子の耳にはクリスマスソングが聞こえるような気がした。

「どのようなご関係なんですか？ あなたがた」

タクシーの扉が閉まるやいなや、貴子はそう切り出し、問い詰めるような視線を眼鏡の向こうから向ける。達也は戸惑ったように視線をおよがせる。

「どんな、って？」

「あのマスターを名探偵って」

ああ、と気付いて達也は考えを巡らす。

「あのカフェ、常連がけっこういて、それでみんなマスターの名推理を聞きに来るんですよ。その話しが面白くて、いつの間にか話しの輪に加わってしまう。それでかな、仲良くなってしまったのは」

「名推理？」

「マスターの昔の仕事仲間が多いかな。仕事辞めて、あのカフェを開いたんだけど、それでもマスターを頼ってくる人が多いんです」

貴子はそっと眉根をひそめる。

「お仕事って？」

「なんだろう？ 詳しくは聞いたことないけれど、CM作ったり、イベントをやっていたとか言っていたかな」

「広告代理店、ですか？」

「そ、そうなのかな？」

タクシーが交差点で止まる。

「お嬢さん、ここ左折でいいかね」

「はい、そこから青山通りに入って、真っすぐです」

達也はてきぱき答える貴子に見とれる。

気付いて見れば、彼女は同じような年頃なのにずいぶん世間慣れをしており、上客相手に取引に向かうところなのだ。

「学生さんですよ？」

「ええ、一応院生ですが」

恥ずかしそうにいうのに、貴子は羨ましそうな視線を向ける。

「いいですよ、楽しそうで」

「はい？」

「だってそうでしょう？ だって、あなた、さっき、突然に手を引いたんですよ？」

「あ、ああ、いえ、すみません……」

「そうじゃなくて……」

貴子は自分が見つけたその楽しそうななにかがなんなのかわからずに、言葉を探す。なんでこんなに楽しいBGMが聞こえるような気がするのか。それはとても近くにあるようで、もどかしい壁の向こうにある。考え込むうちに時間は過ぎ去り、残酷な言葉はやって来る。

「お嬢さん、つきましたぜ」



タクシーが停まったのは、ガラス張りの瀟洒なお店の前で、確かに古いものを取り扱っているのが分かるように、年代物の陶磁器が飾られている。

貴子はタクシーから飛び出すと達也について来るようにいい、達也はタクシーの運転手にしばらく待っているようお願いする。

「さきに行き先だけ教えてもらえると、調べておくんですがね。お急ぎでしょ？」

「ぼくも知らないんですよ。つかまえた付近としか」

達也はきもそぞろにそう答える。

(すごいな、こんなにたくさん)

看板をみると、「東青山 白河」とあり、それだけで貴子の素性が知れる。

ふらりと店内にはいると、色とりどりの陶磁器に囲まれる。ささやかに値札がおかれており、それをちらりとみる。ぞっとはする値段ではあるが、割ってしまっても一生借金を負うような価格ではない。

計算されたライティングが照らす陶磁器をみていると、自分がとんでもない世界に来てしまったことに怖じけづくのではあるが、店内で達也にいぶかしげな視線を向けている店員は達也と同じくらいの若さで、それには親近感を覚える。

「あの？」

「はい？」

視線が合うと、その若い女の子は、達也のそばに寄ってくる。

陶磁器の手入れをするような風をして、達也に聞く。

「どのようなご関係なんですか？ お嬢さまと？」

(お、お嬢さまと言われてもなあ……)

「失礼ですが、お客さまには見えないのですが」

「ああ、いえ、えーと……」

返答に窮していると、二階から貴子が駆け足で降りてくる。

「あった、マスターのいうとおり。達也急いで、時間ギリギリ」

「あ、ああ、はい」

達也は貴子にひきづられるようにタクシーに乗り込む。

店内には若い店員だけが残された。

「ふあ、ファーストネーム……?!」



タクシーが出ると貴子は時計をちらちらと、落ち着きなく見る。

「すごいお店ですね、あんなの博物館でしかみたことが」

おじけづいた達也がせっかく切り出すのに、貴子は本当のことをいってしまう。

「博物館級の品物なんてあんな目立つところに置けないから、そうでしょう？ だから若い人でも手を出しやすい価格帯のものを並べているの」

ますます萎縮するのをちらと見て、貴子は慌ててフォローを入れる。

「あ、あのね、こう考えたらどう？ 高級車を売っている人って、高級車に乗るほどのお金持ちだと思う？ ただ高級車と、高級車をお求めになられるお客さまの取り扱いに慣れているだけ、そうじゃない？ たとえ本当に高級車にのっていても、それは無理をしているだけ」

達也がようやくと頷き、硬直し切った背筋をすこし緩めるのをみて、貴子はくすりと笑う。

「わたし、ときどき麻痺している自分に気づかなくなることがある。小さい頃から父の店で美術品にかこまれてたからかな？ 何千万円の品をみても安いと思うときもあるし、数万円の品でも高いと思うときがある。でもどうかな、それって感覚が麻痺しているんだよね」

「そ、そっか」

落ち着きはじめるのをみて、ほっといきをつく。

「でも、今日のマクズは反対。わかる？ このマクズは数万円のマクズじゃないの」

「失敗すればもう取引してもらえなくなる？」

無言で頷く。

「だから助けてほしいの。あなたは幸運の片割れだから」

「な、に？」

「シャムロック、四つ葉のクローバーのこと。アイルランドでは、クローバーのことをシャムロックと呼ぶの。国花なのよ？」

「そ、そうか」

わけもわからず納得する。すぐに状況を思い出す。

「でもさ、どんなお客さんなの、今向かっているの？」

貴子はバックから手帳を取り出し、ページを繰る。

「貿易会社の三代目のオーナー、ご高齢で、今は閑職だとか。もしかしたら聞いたことがある会社かも。それがふらっとお店に現れたの。店の者は出払っていたから、わたしが対応した。なにかを探しているようで、お声をかけたら、マクスがみたいって」

真っすぐ背を伸ばし遠くどこかを見据える貴子のまなざしは、達也の知らない彼方の世界を見つめているように思える。

「まるでマクス以外には興味がないみたい。すこし話すだけでコレクターだってわかって、それで店にある数点のマクスをお見せした。とてご熱心に見ていたわ。でも値段さえ聞かないの。それなりの物をお見せしたつもりよ？ 一応面子ってものもありますし。それでも、ぐらとも揺るがないの。コレクターという方々は、なによりも真っ先に欲しい、がある方々なのに」

軽くため息をつき、こまったというように首をかたむける。

「それで、いいものをお見せいただいたって。でも今欲しいのは、こういうものではなくて、もっとささやかなちぽっけなものだ。精一杯の背伸びをして海を渡ったマクスではなく、もっと心軽やかにあちこちを旅したマクスなんだって。わかる？」

「いえ、まったく……」

「そうよね。で、そういうのがはいたら教えてくれって、連絡が欲しいって。それから二週間もしないうちにロンドンから連絡が入ったの。それで急遽、航空便で送ってもらって、今ここに

ある」

達也は思い付いていう。  
「ほんと、旅する真葛ですね。日本で作られ、何人の手に渡ったんだろう？ もう百年以上、どれだけの旅を経験した真葛だかまったく想像も出来ないや」

貴子は楽しそうに笑った。

「まったく、達也のいうとおり」

タクシーが停まったのは高層の、一目で住む人を選ぶとわかるマンションで、貴子は不相応に大きなトランクケースを抱えて、オートロックのロビーの前に立つ。

「お約束していた白河ですが、お届けの品をお持ちしました」

インターフォンがなんと答えたかは分からないが、音もなく分厚いガラスのドアが開き、物おじなくすたすと歩む貴子の背中に、達也はついていく。広いエレベーターで最上階に上り、山井と立派な表札の下がる玄関の前にたつ。呼び鈴を押すと、着物姿の上品なおばあさんがドアを開く。

「あら、お店の方？ まあ、ボーイフレンドまで連れて」

「見習いです。わたしもまだまだ見習いみたいなものですが」

さらっと答えるのに、おばあさんは玄関で待つように告げる。

四畳はありそうな玄関にぽつり取り残され、達也はきょろきょろとする。

和風とっていいのかシックな木の香りの装いで、かたわらの飾り棚には、立派な花瓶にツバキの花が活けられている。清楚といえれば聞こえがいいが、その玄関を圧倒するように豪華な色彩をその花瓶は放っている。達也がくぎづけになっているのに貴子はふっと息を抜いて笑う。

「気に入りました？ マクスです、それ」

「ああ、そういえば。立派だ……」

「そう、精一杯背伸びして海を渡ったマクス、かな。それでポルシェぐらい買えるかも」

いじわるっぽい笑みを噛み殺し、貴子はささやくように、とてもご熱心な方だし、器をとてもご存知だわ、と、そっという。

そうこうするうちにおばあさんが部屋へ案内し、まだ主の現れない和室に通される。

障子を透したやわらかな冬の午後の日差しの部屋。

年季のはいった卓の前にふたつの座布団があり、ふたりしてそこへ正座する。コートを脱ぎ、トランクケースの鍵を開けて確認する貴子を尻目に達也は落ち着かない。

「なんかさ、もっと豪華かと思ったら」

「和室だから」

そっけなく答える貴子に、達也はばつわるく眉をしかめる。

「質素にするのがならわしとか？」

「お茶室ってみたことある？ 表千家とか。質素に見えるだけなの」

わかったのかわからないのかそのまま視線を床の間に目を向けると、雪うさぎを描いた掛け軸に、明らかに日本のものではない、ガラス細工の植物を象った花瓶がしつらえてある。

「あ、あれは、わかる。アールヌーボーかな、たぶん。ああやって飾ると、かっこいい」

「値段は聞かないほうがいいと思うかな。ちゃんと見ないとたしかなことはいえないけれども。どちらにしても気が気でなくなるから」

それで達也の背筋がピンと張る。

しばらくして、和装の老人が入ってくる。軽く会釈をし、不自由そうなからだをぎこちなく動かして、座ろうとする。

「しばらくぶりですね。あの時のご親切に」

「とんでもありません」

「ご主人にぜひにと頼まれてましてね、すこし名品というものを勉強させてやってくださいと。わざわざご足労いただくほどのものではないのですがね」

老人がようやくと座布団に座ると、白髪に隠れた涼やかな眼が見えた。

「いいえ、大変ご立派なコレクションですわ」

「はは、それはご覧いただきがありがとうございますな」

おばあさんが茶を載せて現れ、卓のうえに三客の茶碗を置いていく。老人は遠慮なくそれを啜った。

「たいへん真葛がお好きなのですね？ とくに海を渡った真葛が。以前、お伺いしました、精一杯の背伸びをした真葛になるのでしょうか。海を渡り、世間を席卷した真葛が」

「そうみえますか？」

貴子はひそかにひと呼吸おく。

「和と洋といいますか、それがふしぎに折衷した魅力がこのお部屋にもあります」

老人は破顔する。

「なるほど、ご主人がたいへんご自慢されるだけのことはありますな。おっしゃるとおり、真葛の魅力は和の魂を持って西洋に挑んだところにあります。その中で不思議な融合がおこり、世界を変えた。誰だってあやかりたくなりますよ」

「西洋はそれをどう受け止めたのでしょうか。やはりエキゾチックと？」

「そうですね。ふしぎの国から来た、破天荒な焼き物。それは衝撃だったでしょう」

老人は満足そうに頷く。

「やはり、貿易関係のお仕事をされていると、そんな真葛香山の姿が眩しく見えるものなのですか？」

貴子のことばに老人は、ことばをとぎる。それでも、貴子のまなざしに負けたとでもいうように、ひとことふたことを話しはじめる。ええ、まあ、どこから、はなしたらよいのやら。「真葛に心底惚れ込んでいたのは、初代なのですよ。それはたいそうなコレクションだったと聞いています。初代は同時代に生きていますから、収集にもことを欠かなかったでしょう」

「おじいさまが……」

「ええ、だが父の代になってずいぶん売ってしまったようでしてね。戦後の苦しい時期もありましたから、背に腹は代えられぬということもあったのですが、父はなにより祖父のコレクションの価値を最後まで理解できなかった」

老人は静かに茶を啜る。

「わたしが継いだ時にはもうわずかしか残っていなかったのですよ。それでも初代の日記などを読むうちに初代の気持ちもわかりましてね、初代は生糸から始めた貿易商でしたが、やはりいろいろ悪戦苦闘したようなのです。それで同じように果敢に西洋に挑んでいく真葛を戦友のように感じていたのでしょうねえ」

達也には、なにかその明治の大洋を越えた人々の姿が見てくるような気がした。

「あの、」

気付くと達也は口を開き、老人を真っすぐに見据えていた。

「その日記、お貸し頂けないでしょうか。資料としてとても貴重なものだと思うのです」

老人がキョトンとするのをみて、達也は自分があまりに場違いなことをしていることに気付くが、それでも言い出したことがひっこまらなかった。

「大学で産業文化史を研究しています。資料の取り扱いも慣れていきますし、最優先でやりますので複写にお時間はおかけしません」

横目でちらりとみると、しまったと気まずそうにする貴子。それで背を冷や汗が伝う。

「この方は、白河さんのところの方だとてっきり……」

「はい、手伝ってもらっています。大学院がありますから、手の空いた時にですけど。とても詳しく研究されていて、とても頼りに……」

老人は思わず苦笑する。

「それになかなかの好青年ですしな」

「いえ、そんなことは……」

貴子が赤面しているのにも気づかず、達也は照れてみせる。

しばらく老人はほほえましそうにふたりを見ていたが、思い出したように言う。

「そうそう、忘れていました。お持ちいただいた品を拝見致しましょう」

それで貴子は我に返り、トランクケースの鍵を静かに開け、バスタオルに埋まった桐の箱をゆっくりと取り出して卓に置き、紐を解いて、箱からその陶磁器の像を取り出し、更紗の上にそっと置いた。

それは、青磁の獅子を司った置物。

ほんの数センチもない、かわいらしいものだった。

首を傾げ、あいくるしく笑う獅子。

そこには、海を渡った真葛にはない、愛嬌があった。

「確かに。これを求めていました」

貴子はバッグから一封の封書を取り出し、それを老人のまえに差し出す。

「これは父が決めた値です。もしこれでよろしければお譲りします」

封を開くと老人はそっと微笑んだ。

その満足そうな笑みを貴子はしばらく忘れることが出来ず、老人宅をおいとまし、広いエレベーターで地上へ降り、ロビーのオートロックを通り抜けてからも、まだなにか実感がわかなかった。

それでも、達也が大通りの方でタクシーを呼び止めようとしている、そんな光景をみながら、ふとなにかが足りない気がして、それに気付く。

「ねえ、雪が降りそうじゃないかしら、ほらあんなに空が暗いし」

「そうですか？」

背中越しに達也はそう聞き、しきりにタクシーを捕まえようとする。

「降らないですかね？ 雪」

「そうしないと、お客が入りませんものね、シャムロックに」

場違いな達也の答えに、貴子は、ふっとため息をついて苦笑する。

(そうじゃないよ?)

貴子は鈍色に染まる空を見上げ、白い息を吐き出す。

(だってもうすぐ、クリスマスじゃない)

シャムロックに戻ってくる頃には日はとっぴりと暮れ、電灯色につつまれたカフェには、ちらほらと夜の繁盛期のお客が見え始めていた。

「あ、お帰りなさい！ どうだったんですか、取引は？」

「上々、だとおもう、けどなあ……」

はじけるような久実には達也は自信なさ気に答える。

奥のなかなか座り手のいない席に腰を下ろし、抱えたままだった論文入りのバッグを机におく。遠慮がちに立ちすくむ貴子に、笑いかける。

「ここ暗いし、厨房から見えにくいから、誰も座らないんだ」

「そう」

貴子は気のない返事をし、落ち着かない様子で厨房の方をちらちら見る。

トランクケースぐらいおけばいいのにと達也は思いつつ、通り掛かった久実を呼び止めた。

「紅茶二つね」

達也はのんきなため息をつき、つかれたとばかりに首をほぐした。

やがて甘い香りを漂わせるティーカップを運ぶマスターが厨房の奥から顔を出すと、貴子はあわてたようにぺこりと頭を下げた。

「いいんですよ。紅茶代さえ払ってもらえれば」

それにくすりと笑う。

「でも、どうしてわかったんですか？」

ふしぎそうに聞く貴子の問いにマスターは照れるように頬をかき、それから二客のティーカップを置いていく。

「じつはまだ、全然わかっていないんです。顛末を聞かないと分からないことばかりで。さ、お代はいただきますので、遠慮なく」

促されて貴子は席につき、一ヶ月分疲れたとばかりに深い息をつく。

手短かに話すと、マスターはいくつかの質問をし、お盆を抱えたまま腕を組み、クリスマスソングにあわせてトントンと指でリズムをとった。

「それは、あれですね。こう考えると大分見えてきます。なぜそれほど早くそのお客の望む品が見つかったのか、と」

思いがけない言葉に貴子は目をしばたかせる。

「なぜって？」

「おかしいことばかりです。それほどのコレクターなら、マクズは全部買い戻したいはずではないですか？ はじめてお会いした時になぜ値段も聞かなかったのか？ 買う気がなかった。なぜでしょう？」

貴子はしばし考え、自信なさ気に答える。

「うちを信頼していなかったから、ですか？」

「当たらずもなんとやら。腕も、値の付け方も分からない相手に、ボクなら大きな仕事は任せられませんね。そうじゃないですか？ それよりも、小さな仕事で大丈夫そんなことを確かめる。それぐらいの用心深さはあるでしょう。そうではないですか？」

なるほどと貴子は頷くが、それでも納得しかねる様子を見て、マスターは続けた。

「ボクの想像では、その小さなマクズを流したのは、そのご老人本人ですね」

「まさか」

「いえ、そのまさか。その方が筋が通る。あなたがたのことを調べれば、ロンドンの窓口などすぐにわかる、秘密ではないでしょうし。わかれば別の古物商を使って、その小さなマクズを売ることを持ち掛ける。それで商売が成立すれば白河さんのところの買値がわかる」

がたんと貴子は立ち上がり、信じられないという表情でマスターを見つめる。

「今日、白河さんはご老人に売値を渡しました。それで、いくらを手数料としてとっているかがわかるってカラクリです。話しを聞いているかぎりではこの試験は無事パスしたようですが」

「そうですか」

貴子はおちつきなく視線をさまよわせるが、ふと気付く。

「それもなのですが、もっと聞きたいことが。消えたマクズです」

「ああ、それも見当が」

マスターは空いている席にどっかと座り、久実にコーヒーを持ってくるように言う。



「カギは白河さんしか持っていない、ということは、あのトランクケースは開けようがないんです、すくなくとも店を出てからシャムロックに着くまでは」

「たしかに」

「となると、カギが開いた時間は白河さんが昨夜に確認した時から、お店を出る間です。その間はトランクケースはお店にあったのですから、マクズも当然にお店にあります。そうじゃないですか？ それで、お店にあると」

「現にありました」

貴子は頷く。

「でも、わたしでないとしたら、だれが？」

「なにか心当たりはないですかね？ これもテストなんです。白河さんが初仕事を無事にこなせるかどうかの。まさか、カギは就寝中も肌身離さず持っていたわけではないですよね？」

あっと貴子は呆気にとられ、マスターを見る。

「心当たりが？」

「父がいつもいっていました。必ず出掛ける直前に品物を確認しろと」

「それだ」

マスターはおかしそうに笑う。

「寝ている間の盗難が一番怖いのだと」

マスターは笑顔を浮かべ、久実が運んできたコーヒーカップを軽く掲げる。あわてて達也も、貴子もティーカップでそれにならう。

「白河さんの初仕事の無事の完了を祝って」

ささやかな乾杯をし、ぐっと紅茶を飲み、貴子はあわてて言う。

「忘れていました、もっともっと大切なこと」

貴子の動転ぶりにマスターはきょとんとするが、貴子は構わず言う。

「やるんですよ、クリスマス・パーティー、このシャムロックで」

達也がへ？ とマスターを見るが、マスターはにっこり笑う。

「ええ、店を閉めてからになりますし、白河さんをご参加頂けるのなら、ですが」

達也は、その横顔が満面の笑みに包まれていくのにくぎづけになった。貴子は、静かに言った。

「ぜひ」

<了>